

新塾頭に聞く

青経塾 川本芳裕 塾頭

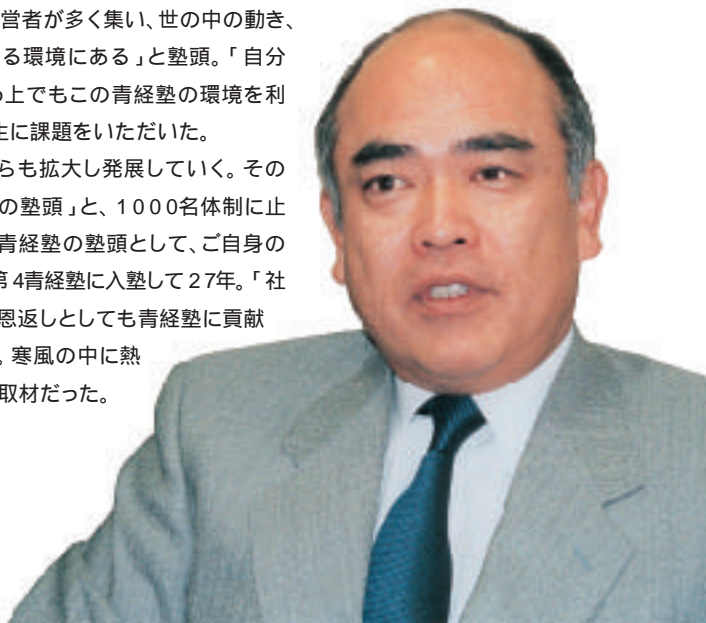
激変期の中の青経塾

今回、新しく塾頭に就任された川本氏に所信、抱負などお話を伺った。「我々は経営者という同志。共に向上を目指す同志としてお互いに啓発ができる場所にしていきたい」と青経塾を語る塾頭。青経塾も1000人体制になり先輩塾、後輩塾の隔たりが現象面として出てきている。本来の塾生同士による競い合い、切磋琢磨が薄れてきている。「塾活動と社業は表裏一体。別々になってはいけない」。ゼミ活動、ブロック塾を通し塾生による相互啓発が活発に出来る場にしていくとのこと。また、「塾活動も形だけではなく経営者として実のあるものにしないでほしい。効率を考え、塾活動を通し全ての塾生が成長できる場にしたい」と塾頭。我々はともすれば眼前の現象面に目を奪われがちだ。青経塾は啓発の場である。時間を費やした塾活動が社業の発展に寄与し、塾生一人一人が成長する本来の姿を再認識しなければならない。

現在、我々を取り巻く社会環境は新しい局面を迎えている。インフレ基調への転換、資材の高騰……。そのような世の中の動きの中で、今はこの先10年、20年を占う重要な位置にあるという。「青経塾はいろいろな業種の経営者が多く集い、世の中の動き、ニュースを話し合える環境にある」と塾頭。「自分の業態の未来を占う上でもこの青経塾の環境を利用して欲しい」と塾生に課題をいただいた。

「青経塾はこれからも拡大し発展していく。その1つの過渡期としての塾頭」と、1000名体制に止まらず拡大していく青経塾の塾頭として、ご自身の就任を位置づける。第4青経塾に入塾して27年。「社業が発展してきたご恩返しとしても青経塾に貢献し続けていきたい」。寒風の中に熱い息吹を感じさせる取材だった。

(30塾 鏡味誠司)



特別講演会 『会社の賞味期限』

希望者参加

期日:平成15年12月8(月)

会場:愛知県産業貿易館 西館10階 大会議室

講師:元吉本興業株式会社

常務取締役 木村政雄氏



人の賞味期限を延ばす

元吉本興業(株)常務取締役木村政雄氏をお迎えて特別講演会が開催された。木村氏は、平成14年10月までの33年間吉本興業に務めてこられた。横山やすし、西川きよしのマネージャーを務め、東京営業所を開設し成功に導く。経営者としても凄腕の持ち主だ。その経験をもとに吉本風に笑いを交えながら、最後まで飽きさせない講演を伺うことができた。

木村氏は語る。「常識が激変している時代。その常識とは、過去から昨日までの一番支配的な考え方。つまり賞味期限付きの考え方なんです」。人にも賞味期限があるという。「島田伸助が竜助との漫才コンビを組み、そろそろ人気も落ちはじめたころ、伸助にサンデープロジェクトから司会の仕事が舞い込んできた。はじめ彼は自信が無く戸惑うが、思い切って報道番組の司会という大役に挑戦した。そして見事に新たなスキルを開発し、彼自身の賞味期限が延ばすことができた」。一つの才能やスキルにのみ頼り、消えていった漫才師は大勢いる。

異業種間競争の時代へ

ブランドでも同じ。1人のデザイナーに頼りきってればいつか必ず破綻する。シャネルやルイ・ヴィトンがいまだに輝き続けて

いるのは、どんどん新しいデザイナーを育てていったからだとも。

木村氏はさらに「物事は変わっていく方が当たり前。今こそ意識、仕組みを変えるチャンスです。今までは同業者間の競争をやっていたら良かったが、これからは予想外の敵が現れる異業種間の競争時代になる」と、力説。具体的に言えば「吉本のライバルは、太田プロや松竹芸能ではなく、ユニバーサルジャパンやユニクロ、ダイソーになるかもしれない」。これからはより視野を広げ、他社と差別化していく事こそが大切である。

人・会社にも賞味期限がある。扱っている商品の市場性を探り、マーケットに対して賞味期限を延ばす努力を継続し続け、会社を成長させることを心に誓った。

(23塾 橋野哲也)